

文章を読む6

前回の続きです。(m)は^{おそれながら}恐は「乍恐」の「恐」。入は中に“点”があつて「合」？と思つてしまひますが、「恐合」という言葉はなく、“点”はただの汚れのようです。すると、入は「恐入」だから「恐れ入り」。次の^イは、というよりも次の3文字は“よく出てくる言い回し”です。



^イは「イ」か「イ」と右下の「寸」から想像

すると「得」。最後の^共は「共」という字です。3文字で「候得共」(そうらえども)と読みます。ここで覚えてしまってください。「得」は「へ」として「候へ共」となることも多くあります。

(n)の最初の2文字は、今でも使う熟語です。^阿は「阿」にも見えてしまひますが、^卒が「卒」ですから「何卒」(なにとぞ)と読みます。^御は「御」

で、^魚は「++」か「ム」で下が「ハ」？なので、全体的には「魚」と

いう感じ。^悲の下も「ハ」？で全体的には「悲」という感じです。そ

こで閃くといひののですが、「慈悲」です。その次の^以は“？”で飛ばして、次の^以は第5回で出てきた「以」(もつて)。慣れていると「御慈悲」と「以」なので“御慈悲を以て”となりそう”と考え、^以を見るのです。しかし^以は

「ヲ」でも「を」でもない。そこで、もう少し先を読みませう。^思は、上が「田」下が「ハ」？。先ほどの「慈悲」から下は「心」と思う人もいるか

もしれません。それで、組み合わせてみると「思」という字です。^召は慣れ

ないと難しいですが、「召」という字です。2つ合わせて「思召」(おぼしめし)。「以」は「以書付」(書付を以て)というふう^{いちにてん}に一二点で返りますから「以思召」で「思し召しを以て」となり、^以の謎が解けます。「御慈悲 思し召しを以て」ですから「之」しかありません。

さて、(n)の^思が一つの文字ではないか？と思う人もいるでしょう。原稿用紙やワープロになれている私たちにとって、一文字の大きさが一定ではないのは、とても違和感があるのです。“一文字に見えても二文字なのでは”と考えるのも頭の体操です。

まだ最後まで行きませんが、次回は復習です。

